

## 二つの「多甚古村」

——日中全面戦争下の井伏鱒二——

前 田 貞 昭

### はじめに

「多甚古村」は、日中全面戦争下の昭和十四年から十五年の間に発表・刊行された作品である。国家権力を支える暴力装置の末端にある駐在巡查が書いた日記という体裁の下に、〈銃後〉の農村を舞台に起る様々な出来事を描いている。そのため、この「多甚古村」を論じれば、時代状況との関わりに及ばざるをえない<sup>1)</sup>。しかし、そのところを一義的に論断し去ろうとすると、そこから滑り落ちたもの<sup>2)</sup>に思いを至すことになるようだ。

従来論者のほとんどは、「多甚古村」総体を捉えることに性急で、「多甚古村」〈本編〉と「多甚古村補遺」とが等質で連続した作品であることを前提として、論を進めている<sup>3)</sup>。日記体裁の短篇連作という形式が、そうした前提を暗黙のうちに促したといえよう。

だが、果して、「多甚古村」〈本編〉と「多甚古村補遺」とは、完全に等質の作品であるとしてよいのだろうか。このことは、これまでに十分検証されてきた、とは言い難い。

東郷克美氏の調査<sup>3)</sup>をもとに「多甚古村」〈本編〉と「多甚古村補遺」の発表・刊行の経緯を簡単にまとめれば、大略、以下のようなことになる。

○「多甚古村」〈本編〉

●昭和十四年二月～七月、各誌に分散発表。但し、初出不詳のため、単行本刊行の際に書き加えられたとも考えられる部分がある。

●昭和十四年七月、河出書房から、「駐在日記」(誌)<sup>4)</sup> 多甚古村」として刊行。

○「多甚古村補遺」

●昭和十五年一月～三月、各誌に分散発表。但し、初出不詳のため、作品集刊行の際に書き加えられたとも考えられる部分がある。

●昭和十五年五月、本文では「多甚古村補遺」、目次では「多甚古村」として、河出書房刊作品集「鸚鵡」に収録。

※「新日本文学全集 第十卷 井伏鱒二集」(改造社、昭和十七年九月)に、初めて「多甚古村」〈本編〉と「多甚古村補遺」

とが併せ取められる。本文・目次とも別個の作品として扱い、それぞれに初刊単行本にある前書きが付されている。

以来、「多甚古村」(本編)と「多甚古村補遺」の両作品は、それぞれに別の前書きが付され、併せて収録される際には、その目次・本文においても別個の作品として遇されてきた。

痼疾とも称すべき改稿癖を持つ井伏が、右に見たような再録の形式に無頓着であったとは考えにくい。井伏自身の発言にも、「多甚古村」(本編)と「多甚古村補遺」との質的相違を示唆するものがある。伴俊彦氏の聞書によれば、井伏は、「多甚古村」について次のように述べたという。<sup>(5)</sup>

徳島の町外れの街道沿いにあった駐在所の巡査が、会ったこともないのに、どういう積りか、毎月、五、六十枚宛自分のことを書いた日記を送り届けてきた。それが何年間かのうちに二尺ぐらゐの高さになった。時々眼を通してみたが、そのうちに書いてみようかという気になった。駐在の巡査に独身者はいないのだが、そういうことは無視して書いてみたし、終りのほうは大分ウソがまじっている。

(傍点、引用者。以下同様。)

「終りのほう」というのが、「多甚古村」(本編)の「終りのほう」を指すのか、そうではなく「多甚古村補遺」のことなのか、この伴氏の聞書では必ずしも明らかではない。しかし、伴氏の聞書には、「多甚古村」という項目は立てられていても「多甚古村補遺」という項目は見当たらない。とすれば、ここにいう「多甚古村」とは、「多甚古村」総体(「多甚古村」(本編)と「多甚古村補遺」の両者)を指すと考え

てよいだろう。「多甚古村」総体の「終りのほう」つまり「多甚古村補遺」の内容が、「多甚古村」(本編)とは異なり、提供された巡査の駐在日記という素材から離れていることを、作者自身が明かしているといつてよいのではないだろうか。

この井伏聞書や、先に触れた再録の体裁を見ると、そこには、全く別個の作品といわれないまでも、「多甚古村」(本編)と「多甚古村補遺」とが質的に相違するものだとする井伏の意思を認めることができるように思われる。

二つの「多甚古村」を巡る周辺の状況はこのようなことであるが、問題はその作品の内実である。「多甚古村補遺」には、「多甚古村」(本編)からの微妙な軌道修正を試みようとする井伏の姿が確かにうかがえるように、私には思われる。おそらく、「多甚古村補遺」において、「多甚古村」(本編)の構造から突出しようとするものを明瞭にし、それが持つ意味を明らかにすることによって、そのような井伏の軌道修正の跡が浮かび上がってくるであろう。ここでは、それをこころみるとともに、引いては、そのことを通して、日中全面戦争下の井伏の姿の一斑を垣間見てみたいと思う。

## 一、「多甚古村」(本編)の方法とその限界

「多甚古村」(本編)二十七日間中、甲田巡査は三十件ほどの事件に関わり、二百人近い人物たちが登場する。この事件と登場人物の数の多さこそ、「多甚古村」(本編)の特質を雄弁に語っている。

「喧嘩三件」に描かれる三件の喧嘩——人夫・石井のうどん屋での

乱暴、人夫同士（双木と「鮮人」）の喧嘩、青物の運搬人と年とった百姓の争い——は、すべて、その日のうちに決着がつき、後日にまくすぶり続けることはない。「多忙多端な日」（四月二日）に至っては、オシチさん夫婦の喧嘩仲裁に赴いた甲田巡査は、急報で心中現場に駆けつけ、さらには、その日の朝持ち込まれていたサンド婆さんの強請まがいの一件を、夜に片着ける。そして、鐘詰工場の用地造成に関わる件を処理するおまけまでつくありさまである。

もはや他の例を一々挙げる必要はないであろう。「多甚古村」（本編）の事件処理の方法はこのようなものである。事件はほとんどその日のうちに解決され、尾を引くことはない。そして、多数の事件、それに関わる人間模様を数多く搦め捕るために、一日のうちにこれほどの事件や人間が圧縮されて描かれるのである。永年の紛争の種であった水争いも、わずか二日間で見事に解決を見ることになるのである。（「水喧嘩の件」）。

先に引用した聞書で、井伏は、

徳島の町外れにあった駐在所の巡査が、会ったこともないのに、どういう積りか、毎月、五、六十枚宛自分のことを書いた日記を送り届けてきた。それが何年間かのうちに二尺ぐらいの高さになった。

と述べている。井伏は、この膨大な素材の前に、かれの「世俗的興味」に従って処理する（作品化する）ことに、余りに急すぎたのではあるまいか。別のところで、井伏が、「もともと材量を豊富に提供されてゐたために、私はかなりたのしい気持で書くことができた」と述べていることは、このことを証拠立てているだろう。さらに、前引の

聞書で問題にした「終りのほうは大分ウソがまじっている」という一節も、裏を返せば、それ以外の部分では、提供された材料に寄りかかっていたことを傍証するものにほかならない。

日記という仕掛を利用して、井伏の興味を惹く題材を「ちよつと随筆風」に次々に描いていくとき、個々の人間の内面や事件の持つ重味は消え失せて、「世俗的興味」に従ったにとどまる、一種のモザイクの断片のような人間模様が出来上がるのである。

しかしながら、駐在巡査の日記という仕掛は、もう一つの可能性を胎んでいたはずである。それは、一々の事件、一人一人の人間を、〈多甚古村〉という村の構造のなかで捉えることである。すなわち、〈多甚古村〉を単なる舞台背景とするのではなく、〈多甚古村〉という（非常時）下の一つの農村の姿を浮かび上がらせる——こういう可能性があったはずである。ところが、井伏は、事件を起こす当事者たちに目を向けても、その事件を〈多甚古村〉の人々がどのように受けとめ、どのような波紋が村に起こったか、というところを描こうとはしていない。事件の当事者たちも、それぞれが個人的な問題を抱えた人間であり、いわば〈多甚古村〉の札着きがほとんどなのである。また、事件は単発的に、相互に何の脈絡もないものとして描かれている。そこに、〈多甚古村〉の姿が浮かびでているはずもない。たとえていえば、井伏はモザイクの一片一片を作りはしても、それによって構成される全体像というものを持たなかったのである。

つまり、井伏は、駐在巡査の日記という仕掛——細切れの事件や人間を細切れのままに搦め捕ることが可能で、必ずしも、厳密な筋立を要求されない——のもっともルーズなところを利用して、「多甚古

村」(本編)を書いたのである。日記の仕掛は、大量の素材を消化するためには恰好のものだったわけである。

他方、豊富に提供された材料を消化するという要請は、「多甚古村」(本編)を、もっぱら甲田巡査の活躍譚に終わらせてもいる。「村の安寧を守る」という巡査の属性を持たされ、大量の事件の処理に当たる以上、甲田巡査は有能な事件処理者・調停者として活躍せざるをえない。甲田巡査は、単なる旅行者や目撃者として、そこに起きる事件を記述するだけにとどまっていることはできない。書かれるべき事件は、豊富な材料として多量に用意されている。一々の事件や人間にかかわらずのよりも、何はともあれ、その材料を処理していく必要がある。とすれば、よほど無能な巡査にでも設定しない限り、甲田巡査を活躍させなければなるまい。

ここに、厳しい評家たちの批判を生む余地の一つが出てくるわけである。批判的な評価を下す人たちは、たとえ駐在巡査であっても国家の権力機構の一端にある以上は、そういう発想から逃れられない巡査なるものに視点を設定し、かれを活躍させるところに井伏の限界があった、と批判しているようである。しかし、視点設定だけでなく、大量の材料を次々に消化していこうとする井伏の方法そのものも、そこには多分に絡んでいる、というべきであろう。

もっとも、巡査の持ちうる権力的色彩に対して、井伏は、注意深くなり、そういう色彩を甲田巡査から拭おうと努めているように見える。そして、それと同時に、その有効性について一先ず問わないとすれば、そういう巡査の権力的側面や(時局)寄りの態度を揶揄し皮肉る場面も、「多甚古村」(本編)に見られるのであって、それらを批判する

姿勢がないとはいえないようである。

その典型的な揶揄・皮肉を描いた場面を一つ挙げてみよう。「狂人と狸と家計簿」(十二月三十日)に、甲田巡査が「裏の消防所へ話しに行った」折に、「小頭のうちの御隠居」から皮肉めいた一言を聞かれたエピソードが記されている。

小頭のうちの御隠居も話しに来て居たが、私が狸の話をする」と狸なら、この村にはなんほどもあるんや。(略)と御隠居が云つた。それではこの村の人は、狸があるのに何故それを捕獲しないのかと私がたづねると、「旦那は、きのふ赤犬を殺したで、今度は山狩りがしたいのやらう」といひ「野犬狩りは人のためになるやらうが、役人の山狩りは嫌や味なものや」と苦しい顔をして「いたい狸といふものは、国粹保存の上からして、天然のものは保存しなくてはならんものやらう」と云つた。

(略)

この隠居の気難しいのは、肝蔵が悪いせみだと自分でもさう云ふのだが、今日は機嫌をなほして狸狩りの経験談をしてくれた。

〔「多甚古村」(本編)の引用は、初刊単行本である「駐在日記(誌) 多甚古村」による。以下同様。〕

このエピソードを典型的と述べたのは、以下の三つの理由による。第一に、その揶揄や皮肉が決してエピソード全体を占める中心素材にはなりえず、あくまでも、附随的に、そこに言い添えられる形をとっている点である。このエピソード全体のテーマは、右の引用部分に続く、狸狩りにまつわる話にある。第二には、その揶揄・皮肉を口にする者を相対化する状況が記されていることが挙げられる。ここでも、

嫌味を言うのは、隠居が「気難しい」からだ、ということになってい  
る。第三に、椰揄・皮肉の類が、甲田巡査の行動や人柄の根底に向け  
られたものではないことである。「多甚古村」(本編)を見る限り、甲  
田巡査が役人ぶったり、巡査としての権力を振り翳すことはない。そ  
れにもかかわらず、このエピソードで「小頭のうちの御隠居」が口に  
するような「野犬狩りは人のためになるやらうが、役人の山狩りは嫌  
や味なものや」という椰揄の類が登場する。つまり、椰揄・皮肉の対  
象とされるのは、甲田巡査自身には当てはまらない、一般的に巡査の  
陥りがちな権力的思考や行為あるいはそれに連なるものなのである。

多くの場合、右に挙げた三つの条件を含んで、甲田巡査に対する椰  
揄や皮肉が描かれる。しかし、それをもって、井伏の鋭い批評精神で  
諷刺を云々することは難しいであろう。いずれの条件も、諷刺や批評  
と言うには余りにも弱々しいのである。椰揄や皮肉があるにしても、  
そこに決してアクセントが置かれていないわけではない(第一点)。確  
かに、一つの状況に対しても一つ別の視角を提示するけれども、そ  
れだけに終わり、作者自身の判断はどちらともつかず、曖昧なままに  
消えてしまう(第二点)。生活実感次元での権力的思考や行為を批評  
はするものの、その批評の対象たるべき甲田巡査はその種の批評を逸  
がれた存在としてしか描かれていない。とすれば、作品内に、存在し  
ない、形象化されていないものを批評するという、ずいぶんの外れな  
ことになる(第三点)。

結局、明瞭な敵、権力的抑圧者の相貌を帯びた存在を描き出さず、  
また、その抑圧を被る者の内側に入っていないとき、椰揄や皮肉も  
表層を搔撫でただけで終るのである。あるいは、作品に即していえ

ば、こういった方が正確かもしれない。「多甚古村」(本編)に見受け  
られる権力的なものに対する批判は、積極的な意味合を帯びて突き出  
されているのではなく、巡査という権力的存在を視点人物に設定した  
ことに対する、井伏流のジェスチャーである、と。

そこにとどまるからこそ、巡査を末端に置く国家権力そのものに対  
する批判は生まれようがなかった。そのため、後に削除される「しか  
し日本が強い、世界一だといふ結論で最後の意見は合致する」(十二  
月九日)といふ一節が書かれ、また、水喧嘩の一件が落着いたとき、  
戦後、改稿せざるをえなかった、

一ばん上席にゐた村長の指図で一同は端然と坐りなほし、大日  
本帝国万歳と多甚古村万歳を三唱して解散した。<sup>10)</sup>

という場面が無批判に描かれたのである(六月八日)。そして、「出征」  
軍人を送る場面も、(多甚古村)に起きる、ありきたりの出来事とし  
てしか登場してこない、ということにも、それは及んでくる。

井伏は、一方では「非常時」「時局柄」「戦時中」といった類の語彙  
を安易に使用して、国家権力の指向するところに、(決して積極的と  
はいえないのであるが)知らず識らずのうちに同調すると同時に、他  
方では、貶価していえばジェスチャー次元であるにしても、身近なと  
ころに見うる権力的存在に対する批判の目も持っていた。「多甚古村」  
(本編)は、このような中途半端なところに成立している。

この中途半端性に、当時の井伏の認識の限界や国家権力との緊張関  
係の欠如を指摘することができる。また、時代状況との関わりを「多  
甚古村」(本編)に見ようとしたとき、多義的で曖昧な姿しか現われ  
ないのも、ここに原因があるだろう。しかし、「多甚古村」(本編)の

厄介なのは、逆にいえば、ここに、駐在巡査の日記としてのリアリテイが生じ、さらに、また、〈非常時〉下の農村の人々の意識と通い合うものがあつたことである。

別言すれば、国家権力との関係を視野の外に遠去け、問題を巡査という身近なところにとどめておいた。そのことによって、〈多甚古村〉という人間模様を描く舞台背景を確保したのである。——そこに国策宣伝でもなく、暗い農村ルポルタージュでもない、「多甚古村」〈本編〉の場が出来上がった、ということもできよう。

## 二、〈多甚古村〉のなかへ

### —「多甚古村補遺」の基本特色—

「多甚古村」〈本編〉の「休日を持つ」(三月二十二日)の冒頭近くに、こういう一節がある。

いつものやうに官服をつけ自転車で村道を走つたが、いつも通る道であるのに何度も自転車をおりて眺めたほど、今日この村は美しい風景に見えた。澄みきつた小川の水、麦畑、どつしりとした石橋、屏風のやうに聳える山、峯の上にある青い空、みんな美しく静かであつた。(略)甚平さんの畠と作二郎の畠は一本の細い畦道で仕切られてゐて、作二郎は自分のうちの畠を耕して行くついでに馬といつしよに畦道を越え、甚平さんのうちの畠も耕してゐた。かういふ隣人愛の行為は非常時でなかつたら、他人は作二郎の行為を見て彼が甚平さんの娘に懸想してゐると邪推するだらう。

美しい農村風景と、〈非常時〉下の美しい隣人愛とがこのように映つてくるのは、必ずしも、甲田巡査が任務を離れて休日を樂しむ気持ちになつてゐるためだけではない。「多甚古村」〈本編〉の方法に従つて〈多甚古村〉の姿を描けば、「みんな美しく静かであ」り、そこに〈非常時〉下に見られる「隣人愛の行為」を登場させる、という模範的農村風景になつてしまふのである。先述したように、井伏が個別的な事件、それに絡む個々の人間たちへのみ目を向け、〈多甚古村〉の内部に分け入つていこうとしない以上、このように外側から眺めた風景の次元においてしか〈多甚古村〉は捉えられない。

ところが、「多甚古村補遺」に移ると、そういう美しい農村風景の内側にあつて、村の秩序を支えているはずの〈顔役〉たち(負のイメージを伴うことばは、「多甚古村」〈本編〉では全く使用されず、「多甚古村補遺」で初めて使われる)や、外側からは美しげに見える農村社会の實際に、井伏の筆は及んでくる。

「多甚古村」〈本編〉に描かれた美しい農村風景は、まず、「多甚古村補遺」の冒頭で破られる。

そこに描かれるのは、一先ずは、「東分の海岸寄りの部落十軒」に与えられた村長寄付金の余額わずか二銭をめぐつて起こつた、松さんと春さんの喧嘩の顛末であり、入院中の春さんに八つあたりされたその女房・オテツの自殺未遂事件である。愚かで滑稽なこれだけの話で終わつていれば、このエピソードも「多甚古村」〈本編〉のそれと何ら選ぶところはない。

「多甚古村補遺」中のエピソードたる所以は、この事件を端緒に村長・反村長派の軋轢が明らかにされてくるところにある。反村長派の

網元・吉野たちは、こうした事件の原因が村長寄付金にあり村長を取締るべきだと要求して、二度までも駐在所に押しかけてきて、甲田巡査を手古摺らせる。そればかりではない。反村長派の人々は、村長経営の貸別荘に滞在していたアメリカ人・ヘンリー一家に嫌がらせをして追出し、その後によつてきた都会女性・マサコの悪い噂を吹聴して、彼女をも排斥しようとする。村の有力者たちを相手に「多甚古村」(本編)末尾「水喧嘩の件」で鮮やかな手腕を見せた甲田巡査も、この(顔役)たちの反目には、「全く気難しい人の多い村である」と嘆息を洩らして手を上げざるをえない。

他方、(顔役)たちだけではなく、(多甚古村)の人々が農村に住むがゆえのマイナス面も、「多甚古村補遺」に批判的に描かれる。

都会的風俗をそのまま持ち込んで(多甚古村)の人々を驚かせた無邪気なマサコは、かれらの間で次のような評判を立てられる。

村の人たちは何の根拠があるのか知らないが、彼女を売笑婦のやうに云つてゐる。たぶんヘンリーさんの第二号はんだらうと云ふものもあり、もと大阪の赤玉のダンサーだと云ふものもあり。心中未遂者だと云ふものもあつた。村の過半数の人たちは、どこか大阪あたりの鉄工場主の思ひもので、淫乱あがりだらうと云つてゐた。

あるいは、

村の顔役たちの間でも、総じて彼女の評判は芳しくなくなつた。手に負へぬ色情狂で、男に近づいて関係が出来たら直ぐ厭きて、また次に移る女だといふ評判になつた。

さらに、

「ときに旦那、あの松原に村長の建ててをる別荘へ、ちかごろ変な女が来てをるちう噂でしやないか。何でも村の若い者の噂では、先に住んでをつたヘンリーさんの廻し者ちうことですが、この非常時の際とて僕は一応旦那にお伝へしときますけに」

と注進に及ぶ反村長派の老人まで出てくる始末である。要するに、この老人は、アメリカ人・ヘンリーも「外国の廻し者」であり、当然、マサコもそうだと言うのである。

いずれにしても、自分たちとは異質で理解し難い者を排するために、おのれの表向き抱懐する道徳規範から外れたレッテルを貼りつけるわけである。そのレッテルが、淫乱であり、「外国の廻し者」である。

これらの根底には、他所者を排除しようとする農村的社会の偏狭がある。甲田巡査が折に触れて口にし、「多甚古村」(本編)の「水喧嘩の件」では美談の契機であつた(非常時)は、ここに至つて、反村長派の大義名分に利用され、農村的社会特有の偏狭の契機となる。この他所者を排除する農村的偏狭が、つまるところ、(非常時)を振翳して己れのみを正しいとする支配権力の偏狭と一連なりのものであつたことは、言をまたないであろう。

(多甚古村)の人々は、こういう心理機制に捉われて、悪しざまに他所者の噂をする一方では、かれら自身も村長派・反村長派の軌轢のなかに生きてゐるわけである。

こうした(多甚古村)の内実が描かれてきたのは、おそらく次の三つのことが「多甚古村補遺」で行われたためであると考えられる。その一つは、事件の当事者だけでなく、その事件をあれこれ取り沙汰する(多甚古村)の人々を登場させたことである。「多甚古村」(本編)

では、事件の当事者だけが登場していた。それに対して「多甚古村補遺」では、その事件によって生じた波紋の受け手も描かれるのである。

このことと関連して、二つめに、その波紋の受け手が〈多甚古村〉の上層・中層部にまで及んでいることである。事件そのものも、〈多甚古村〉で札着きの人間だけが起こすことにもなっていない。最後に、個々の事件をそれだけに終わらせるのではなくて、時間的連続性のおかげで浮かび上がらせていることである。こうして事件は〈多甚古村〉全体の中で捉えられるわけである。

「多甚古村補遺」においても、そこに描かれているのは、人間の頑迷や愚かさあるいは人情といったものである。しかし、それは、特殊な個々の人間にだけ見られるのではなく、〈多甚古村〉全体を包むものとして描き出されたのである。そうしたとき、「多甚古村」〈本編〉の「平和な故郷の農村」という美しい観念は崩れ去り、〈多甚古村〉という日本の農村の一つの姿が現れてくる。

時代状況と直接関わるかに見える〈非常時〉下の農村を舞台背景にしながら、「多甚古村」〈本編〉で、井伏は、かれ好みの〈多甚古村〉というモザイクの世界を築いていた。そこで、井伏は、モザイクの一片一片に注意を払いはしたけれども、その全体像を構造的に描き出すとはしなかった。そうしたところから抜き出て、〈多甚古村〉の全体像を捉えようと試みた地点、それも決して美名どおりの農村ではなく、他所者を排斥しようとする農村的な偏狭が支配し、村の内部に解消し難い軋轢を持つ世界として描こうと試みた地点に、「多甚古村補遺」は成立しているのである。

### 三、「多甚古村補遺」の甲田巡査

「多甚古村」〈本編〉の甲田巡査は、オキ又婆さんの自殺事件（「オキ又婆さんの件」三月十日）があつたにせよ、権力を振りまわすことなく、事件処理の主役として見事に「村の安寧を守」っていた、といつてよいだろう。井伏は、彼をそのようなものとして描いている。

しかし、「多甚古村補遺」に移ると、そういう甲田巡査像にも、その活躍ぶりにも、変化が現われてくるようだ。

井伏が「演説めいた」ことを決して好まない作家であるのは、よく知られているだろう。かつて、作中人物に「演説をこく」（「朽助のゐる谷間」）、「創作月刊」、昭和四年三月、等）と言わせた井伏である。

その井伏が、甲田巡査に「演説めいた話を一席のべ」させて、その上、居合せた一人の老人にその空論ぶりを正面から擲論させる場面を描いているのである。

その場面——「初めてこの土地に赴任して来たとき」に、「村田さんにやりこめられた」場面——を次に引用してみよう（「寄付金持逃げの件」十一月十日）

当事、私はこの土地の事情もよくわかつてゐなかつたので、町の警察にゐたときと同じやうに自由な気持で村の会合の席で演説めいた話を一席のべた。そのとき私に第一矢を酬いたのがこの村田さんであつた。「駐在はん、君はどうも若すぎていかん。君が沈著寡黙といふ美德に欠けてゐることは、現代とはいひながらどうも苦々しい。いつたい警官たるものは、昔を今に武士的の面影を伝へ残してゐる唯一の社会的存在である。その警官が、村の道路の



上に馬糞があるのはきたないとか、陽に乾いた馬糞は粉になって空中に散乱して不衛生だとか、裸で昼寝をしたら頹廢的であるとか、そんなこまごましたことを一国の大事變のやうに絶叫するのは笑止千万だ。儂はこの年になつても、村道の馬糞で衛生を損ねたことはないからなあ」と村田さんは出征軍人家族待遇の席で私を咎めた。つまり私は満座のなかでやりこめられたわけで、初めのうち私は憤然としたが次第に冷静になつた。よく考へてみると非は私にあるやうであり、町の警察官より田舎の警察官の方が遙かに窮屈なものだといふことが漸くわかつた。それに村の長老たる人を明朗にさせておくことは村のためだと思つたので、「どうもすみませぬこつて」と私は村田さんに謝つて「まだ村に慣れまへんよつてになあ、気にせいで下され。そのうちに私も一生懸命にして御満足の行くやうにしますけになあ」と云ふと、今度は村田さんの方で赤面して「なにも儂は、あんたを非難するつもりはないのやが、このついでの話なんや。一般の警官たるものの本質を云つたまでのことや。老人といふものは頑固なものやからなあ。まあ気にしないで下され」と和議を持ちかけて来た。

土地の事情を知りもしない新参者の突出を、その場の有力者が咎めるという構図は、農村的な社会でよく見受けられるものである。甲田巡査がこの場面をそのようなものとして判断していることは、かれの応答ぶりや、村田老人が「和議を持ちかけて来た」という解釈にうかがわれる。

と同時に、このやりとりは、新参駐在巡査の安手な衛生思想や風俗観念が、農村の生活感覚の現実性(ソリタリイ)を背景にした村田老人のことばによ

つて、あっさり破られるという一面を持っている。この村田老人のことばも、「多甚古村」(本編)では、甲田巡査を批判することばに、「一国の大事變のやうに絶叫するのは笑止千万だ」などという強烈なものではなかつた。「多甚古村」(本編)では、甲田巡査は、かれに似つかわしくない外れな皮肉を聞かされるにしても、このような現実的な生活感覚によつて、正面から反撃されることはなかつた。また、水喧嘩仲裁のために招いた村人を前にしたときも、甲田巡査は「懇談的に私の胸中を披瀝した」とされていて、右にあるような生活感覚から浮き上がった言辭も見られなかつた(「水喧嘩の件」六月八日)。

もちろん、赴任早々のこととして時期設定がされているので、このようなエピソードが生れたといえばいいないことはない。また、ここに、村田老人と親しくなつた由来を記しておく必要があつたことも確かであろう。しかし、すでに「多甚古村」(本編)で赴任当初を思わせることばが散見される以上は、そこでこのエピソードが書かれた方が自然であろうし、また村田老人を登場させるのにこのような内容を持つエピソードが不可欠であつた、ともいい難い。

以上のように考えてくれば、わざわざ井伏がこのような赴任当初のエピソードをここに置いたのは、「多甚古村」(本編)にも見られたものさほどアクセントのなかつた、権力的存在としての巡査に対する批判を、もう一步押し進めようとしたからではなかつただろうか。

「多甚古村」(本編)では、甲田巡査が皮肉られるにしても、ほとんど、かれの側にその皮肉に相応する実質はなかつた。が、「多甚古村補遺」では、右の例でいうと、一度は村田老人の擲擧に相当するやうに「こまごましたことを一国の大事變のやうに絶叫」させておいた

上で、その後には「よく考へると非は私にあるやうに」思わせる、といふかたちになっている。わずかの間であっても、甲田巡査は、権力的属性を発現し、椰櫚・皮肉を浴せられるに相応しい実質を見せるのである。そうしておいて、次に、かれ自身によってその非を悟らせる。

この方法によって、巡査の権力的様相を批判すると同時に、甲田巡査を救い出すことが可能になる。「多甚古村」(本編)の甲田巡査像からさほど逸脱させることなく、しかしながら、一歩進めて巡査の持つ権力的属性を描き出すことができたのは、「多甚古村補遺」において、こうした方法がとられているからである。

それは、甲田巡査が国家権力に連なるものとしての面を見せる、例のヘンリー一家や、都会女性マサコにおける場合でも同様である。

ヘンリー一家の実際を知っていれば滑稽としか評しようがないが、甲田巡査は、真剣に「これこそ毛唐のスパイだと思ひ込み、周到な注意をはらつて監視を怠らなかつた」上、「町の本署にも照会して」、その経歴や通信の様子を知ろうとする。他方、もう一人の他所者、無邪気で奔放な都会娘マサコに関しては、彼女の「危険思想」を疑い、彼女が口にしたアンリ・ルソーとブルーストの名前を手掛かりと思つて、甲田巡査は、本署の知人にまでかれらの「思想傾向」を問い合わせる、といった「特高主任」ばりの珍妙な活躍ぶりを示すのである。

先に述べたように、村人たちがヘンリー一家やマサコを排除するのは、そこに他所者に対する偏狭や村内の対立が働いていたからであった。それに対して、甲田巡査が右のような行動を取るのには、(非常時)という(時局)認識の下に与えられた任務に精励するためである。しかし、ヘンリー一家やマサコが無垢であるだけに、村人や甲田巡査の

行動は全くのナンセンスとなる。甲田巡査に即すれば、かれが巡査という国家権力の一端にあり、その役割に忠実であるがゆえに、このようなナンセンスな行動を強いられるのである。甲田巡査が別れを告げに来たヘンリーの「グッドバイ」という発音を耳にして、急に感傷的な中学時代の思出に耽つた後、

全く若き日の感激の瞬間であつた。しかし私は、今は一個の平凡なポリスになつてゐる。ヘンリーさんがお別れに来て涙を目にためても、最早や私は真底から感激する人間ではなくなつてしまつた。

と述懐するのも(「人命救助の件」十一月二日)、かれの年齢が、「若き日」の無垢を失つたというにとどまらず、その無垢と「ポリス」である現在の自分との乖離に思い至つたからであろう。

それにしても、このヘンリー一家とマサコに対して甲田巡査が取る行動は、念入りにずいぶんと滑稽なものとして描かれている。それが滑稽であるだけに、井伏の目は辛辣である、といえよう。これほどあからさまな甲田巡査の失敗談は、このような(時局)的な事件にしか描かれない。とすれば、(非常時)(時局)(銃後)といった一連の觀念の持つ怪しさを諷刺しようとする井伏の意図を、ここに読み取るのが可能であろう。

(非常時)(時局)(銃後)という時代を支配することばが、結局、国家権力そのものと連続するものである以上、甲田巡査がこのような觀念に動かされる要素を描き出した井伏は、かれの背後に国家権力とつながるものを見た、といつてよいだろう。ここに、「多甚古村」(本編)を越えるところがあるわけである。

そういう属性に支配される甲田巡査を、井伏は、「多甚古村」(本編)と同じように活躍させることはできなかったのではないだろうか。甲田巡査は、「多甚古村」(本編)と同様な事件に際しても、事件解決の主役の座から転落して、右往左往するようなことになる。

寄付金持逃げ犯の山狩りを指図したのは、本来その役割を果たすべき甲田巡査ではなく、村の有力者である村田老人であった。おまけに、その犯人は、山狩りの最中から駐在所で甲田巡査の帰りを待っていたというのである(「寄付金持逃げの件」)。村娘の心中未遂事件では、甲田巡査は、情報を得て、隣村との間を自転車で駆けずり廻るのだが、結局、かれの介入する余地はなかった(「村娘有閑」)。また、先述したように、村長派・反村長派の対立には嘆いてみせることしかできなかったし、春さんの女房・オテツの自殺未遂事件を完全に伏せておくことができず、新聞記事によつて村内にセンセーションを惹き起こしてしまふ。

「多甚古村」(本編)にあった、事件の手際よい処理者や、人情の機微に通じた巡査としての甲田巡査の面貌は、このようにして薄らいでいくのである。

これは、前節に述べた方法の改変と表裏一体の関係にあるのだが(事件が甲田巡査の活躍で解決してしまえば、「多甚古村」に及ぶ事件の波紋や、それを通しての「多甚古村」の構造も描けないし、また、事件相互の関係も生じないであろう)、それと同時に、甲田巡査を含めて巡査という存在が国家権力の一部であることを否定できず、そして、その国家権力の指向する方向に危ういものがあることを、井伏はこういうかたちで描き出そうとしている、と考えられる。

以上に述べてきたような、「多甚古村」の全体を捉えようと試み、甲田巡査の微妙な変化を描き出そうとする井伏の手付きの背後には、かれの内部に生じてきた時代状況との緊張関係を読み取ることができるよう、私には思われる。

#### 四、「多甚古村」前後の井伏

蘆溝橋事件から一ヶ月余、中国北部では戦線が拡大し、上海の戦闘も激化していた頃の日付(八月二十八日)を持つ「生活のルポルタージュ」という文章を、井伏は「月刊文章」(昭和十二年十月)に発表している。

例外のときは別としてこのごろはたいいてい朝六時に起きる。それから新聞を読んでまた寢床にはいるのがおきまりだが、新聞を読み終るのにたつぷり三時間かかる。戦争記事を読みながら北支那の地図と上海方面の地図に絵具で記しをつけ、両軍の作戦状態と強弱の有様を想像する。

ふだんは地図をちつと見てみると私は旅行に出たくなるが、このごろは地図そのものが生きてゐるやうに見える。太閤秀吉は晩年いつも地図ばかり見てゐたといふ話だが、なるほどそれも一理ある所業であつたかと考へる。秀吉が地図を見てゐると眼前に軍馬の姿と陣型の光景が浮かび出たかもしれない。しかし秀吉は弓矢の道の玄人である。さうして大先輩である。同じ戦場を想像するにしてもこの大先輩は、私の場合とはまた異つた胸のときめきを感じたかもしれない。

以下、

私は新聞を見るととき戦死傷者の名前を注意して見る。今日までに私の知人の名前は出なかつたが、「この戦闘においてわが軍に死傷なし」といふやうな記事を見ると、ほとと胸を撫でおろす心地である。私の知人もいま戦場に行つてゐる。

と続き、その知人たちへの氣遣いや、檀一雄の呆氣ない出征ぶりに触れた後、

以上は生活の報告といふわけではない。関心事についての一記録である。

との一文で結ばれる、井伏の思考特性をよく示した文章である。そして、また、この時期の井伏の姿勢をもよく示している、といつてよいだろう。

すなわち、それは、抽象的思考や何らかの概念装置によつて、日中全面戦争という大状況を把握しようとするのではなく、知友の出征という井伏の生活圏の出来事から事態を眺めようとする思考の特性である。この狭い生活圏との関わりに根柢を置くとき、きわめて現実的な生活感覚で捉えられるために、反論し難い確固たる重みを持つのであるが、しかし、反面、その出発点となる生活感覚と大状況との間にいくつもの階梯を経なければならぬ場合、非常に危いものとなる。

井伏が「たつぷり三時間かか」つて読んだという新聞は、当事、その報道記事が広汎な記事差止め事項によつて制約されていたばかりでなく、たとえば桐生悠々によつて「この戦争で儲けるものは、軍需工業者と新聞社だろう。／彼等が戦争を歓迎するのは無理もない」と道破されたように、軍用機献納、国防献金等のキャンペーンに狂奔

し、無批判な言説で戦争熱をあおっていた、<sup>15</sup>というのが実態であつた。

そのような新聞に対する批判は、全く、右に引用した井伏の文章には見られない。また、出征して行つた知友への氣掛りに収斂する文章ではあつても、戦場となつた地に住む中国の人々に対する視点も一切ない。新聞を読み、地図に記しをつけ、作戦状態と敵味方の強弱の様子を想像するところには、そういう視点は皆無で、素朴なナシヨナリズムの臭いが強く漂つている。おのれの生活圏に關つてこない限り、井伏の認識は、ここにとどまる。

このような文章の延長上に、「多甚古村」(本編)冒頭近くの、温帯さんと寒帯さんは、温帯地で戦争の話をする。支那はいつまで戦ひますか。英国、ロシヤ、フランスは戦ひますか。伊太利と独逸は、欧州の平和を維持させますか。いつもさういふ話をするのがおきまりで、その日その日の新聞にある通りのことをお互いに云ふだけである。私たちに定見があるわけなし、新聞に書いてない話になると双方とも意見はない。しかし日本が強い、世界一だといふ結論で最後の意見は合致する。

という場面が出てくるのである。そして、甲田巡査が無批判に(非常に)時、(戦時下)ということばを口にすることも、つまるところ、このよ

うな意識と連続している、と云つてよいだろう。ここに、国家権力や時代状況との緊張の弛緩を想定できるわけであるが、井伏は、そのような地点から進んで、鋭い国家権力に対する批判やそれを支えた人間たちに対する批判を展開することとなる(直接的な)かたちで具体化されるのは敗戦後のことに属するが、戦時下にお

いても、検閲を配慮した上のことではあるけれども、それが認められる。

その契機は、井伏自身がかれの生活の場から国家権力によって引き離され、徴用された体験であった。それが、最も痛切な、井伏の国家権力と対峙した体験であったが、それ以前、この「多甚古村補遺」をはじめとする作品に、そうした権力批判の萌芽が見られるのである。

井伏が徴用されるのは、昭和十六年十一月のことであるが、そのしばらく前から、「多甚古村補遺」や、「幕末の地方役人の無能とだらしなさを下積み<sup>13</sup>の地方の庶民たちがカヴァーしてやつて、それで漸く世の中が保たれてあるといふ有様にもちよつと触れるつもりであった」と言う「隠岐別府村の守吉」(「オール読物」、昭和十六年九月)や、同様の趣旨をうかがわせる「川井騒動」(「サンデー毎日」、昭和十五年一月)、また、出征後に残された留守家族の頼りなさを捉えた「小間物屋」(「中央公論」、昭和十六年一月)といった作品を書いている。「多甚古村」(「本編」)から「多甚古村補遺」と書き継がれるなかでの、甲田巡査像の変容や、(「多甚古村」)の内側に分け入ってゆくこととする井伏の姿勢は、このような文脈の上に成立しているのである。

どこでやめてもよい、また、どこまで続けてもよい作品形式の「多甚古村補遺」が、昭和十五年五月の時点において、「多甚古村」(「本編」)の半分にも及ばない分量で終わってしまったのは、(「非常時」)下の農村を描く限り、井伏の意図をそのまま実現することが不可能だったからではないだろうか。「多甚古村補遺」をさらに徹底すれば、甲田巡査は、井伏の言う無能な「地方役人」たらざるをえないであろうし、国家権力は同時代のこととして様々に諷刺されるであろう。一方、(「銃

後」)を守る農村が、必ずしもその美名どおりのものでないことも、「多甚古村補遺」で明らかにされつつあった。このような方向性を持つ「多甚古村補遺」が、そのまま書き進められるようなことが可能であったとは思われない。「造言飛語」、「不穩言動」といったことばが待ち構え、その認定は権力の恣意によつたと評してよい時代だった。<sup>(14)</sup>このような事情の傍証となるのが、これ以後の、過去に題材を得て同時代と直接に関わることを回避した(「まげもの」)の諸作に向かい、あるいは、国家権力の設けた枠組に従いながらも被支配社の側に巧妙に身を置こうとする作品を書く、井伏の時代のやり過ぎし方である。

たしかに、(「銃後」)風景の一つである金属回収を題材にしながら庶民の痛みを描く「鐘供養の日」(「陣中読物」、昭和十八年十一月頃)と比べると、「多甚古村補遺」末尾に登場する金属回収の場面には甘さが残り、戦時下から敗戦後にかけての農村への鋭い批評意識が見られる「遙拝隊長」(「展望」、昭和二十五年二月)のような構造把握に、「多甚古村補遺」は及ばない。視点設定において「多甚古村」と同じ構造を持つ「花の街」(「東京日日新聞」)「大阪毎日新聞」、昭和十七年八月(十月)が抵抗文学であり<sup>(15)</sup>、そして、当事のシンガポールでは被支配者であったユーラシアンの少女の目で戦争を描いた「或る少女の戦争日記」(「新女苑」、昭和十八年三月(四月))、「待避所」(「文学界」、昭和十八年三月、六月)のような作品が書かれたところには、井伏の徴用体験を最大の要因として挙げなければならないまい。そうであるとしても、今まで述べてきたように、その萌芽は、国家権力や時代状況との緊張関係を持ち始めた「多甚古村補遺」に、既に認められるのである。それは、「多甚古村」(「本編」)との相違に看取できるので

り、「多甚古村補遺」との表題は、まことに象徴的であった、といえよう。

(昭和五十九年九月稿)

〔注〕

- (1) 二つの見解がある。その一つは、杉浦明平「庶民文学の系譜——井伏鱒二」(「午前」、昭和二十四年二月。のち、「井伏鱒二」と改題して「現代日本の作家」・未来社・昭和三十一年九月、等に収録)、田辺健二「多甚古村論」(「近代文学試論」、昭和四十七年九月)等、井伏をもつても時代の波を被ってしまった、という見方をとるものである。もう一つは、それとは逆に、時代制約を乗り越えた井伏を見ようとするもので、大胆な読みを示す熊谷孝「井伏鱒二(講演と対談)」(鳩の森書房、昭和五十三年七月)や、詳細な論証の上に立って一定の留保条件をつけたつそれを認める東郷克美「多甚古村」の周辺」(「国文学ノート」、昭和四十七年三月)等がある。

- (2) 二つの「多甚古村」の相違を指摘したのは、私の知る限り、「続編は正編よりもびのびとして小説らしい展開を持つてゐる」と述べた伊藤整の「解説」(「多甚古村」、新潮文庫、昭和二十五年一月)だけである。しかし、伊藤の指摘もこれにとどまり、それ以上の展開はない。

- (3) 東郷、前掲論文。

- (4) 目次には「駐在日記。多甚古村」、扉には「駐在日記。多甚古村」、奥付には「多甚古村」とある。

- (5) 伴俊彦「井伏さんから聞いたこと その二」(「井伏鱒二全集第三巻月報4」、昭和三十九年十二月)。

- (6) 寺田透は、「しかしこの作品は面白くはあつたけれど好きになれなかつた。作者の世俗的興味が弾みすぎてゐる。ここにあるのは人間に対する愛情といふより、世態人情の面白さに釣られた興味の動きなのだ」(「井伏鱒二」・「批評」・昭和二十三年三月。のち「同時代の文学者」・講談社・昭和三十一年五月等に収録)と述べている。首肯すべき意

見である。

- (7) 井伏鱒二「解説」(「新日本文学全集 第十巻 井伏鱒二集」、改造社、昭和十七年九月)。

- (8) 注7に同じ。

- (9) 杉浦、前掲論文等。

- (10) 「増補版井伏鱒二全集 第二巻」(筑摩書房、昭和四十九年四月)では、一ばん上席にゐた村長が「みなさん、お手を拝借」と云つたので一同は坐りなほし、シャン、シャン、シャンと手を拍つて、みんな「どうも有難う」と口々にいつて解散した。

- (11) 桐生悠々「雑音騒音」(「他山の石」、昭和十二年八月五日)。引用は、「桐生悠々反軍論集」(新泉社、昭和五十五年八月)による。

- (12) 藤原彰「昭和の歴史5 日中全面戦争」(小学館、昭和五十七年十月)。

- (13) 井伏鱒二「あとがき」(「まげもの」、鎌倉文庫、昭和二十一年十月)。

- (14) 西ヶ谷徹「支那事変に関する造言飛語に就て」(「思想研究資料特輯」、昭和十四年二月)、林善助「支那事変下に於ける不穩言動と其の対策に就て」(同右、昭和十八年十月)。いずれも、東洋文化社会(社会問題資料叢書)に複製。

- (15) 拙稿「井伏鱒二・その戦時下抵抗のかたち——「花の町」を軸にして」(「近代文学試論」、昭和五十八年六月。のち「井伏鱒二研究」・深水社・昭和五十九年七月に収録)。